

『エミール』にみる教師のことばかけ

専攻 学校教育学専攻
コース 教育コミュニケーション
学籍番号 M07014A
氏名 三好 永子

I. 問題の所在と研究の目的

現在起こっている子どもをめぐる問題として、不登校・非行・いじめ・自殺・犯罪などが取りざたされている。それらを引き起こす原因として、家族関係や友達関係が良くないこと、塾や稽古事などで子どもが自由に過ごす時間や遊ぶ時間が十分ないことからくるストレスなどが挙げられている。私は、このような行動を起こすに至るまでの子どもの心の状態に関心がある。子どもたちは、自分の素直な気持ちを、素直に表出できず、自己のうちに閉ざしたままであるため、いつかその感情を爆発させてしまうのではないだろうか。その時が、いじめであったり犯罪であったりするだろう。そこで、私が注目したいことは、子どもはどのようにしたら自分の欲求や感情を自然に表出することができるようになるのであろうかということである。

その手段のひとつとして、教師からのアプローチが重要な役割を果たすであろう。まず教師は、子どもに対して子どもが自分の欲求や感情を冷静に見つめ反省できるようなことばかけをする必要があるのではなかろうか。それは、子どもに言い与えるようなことばかけではなく、子ども自身に気づかせるようなことばかけであることが望ましい。

ルソーは、教育者は子どもに直接的に指示を与えたり注意をしたり自己の恣意的な判断によって子どもに何かを教え与えるのではなく、子

どもの発達段階に即したうえで、教師は子どもをとりまく事物の背後に身を隠し、事物を通して子どもの自然本性の要請にこたえるような教育(消極的教育)をする必要があると主張した。この消極的教育によって、子どもが自然に自己の感情を表出することができるのではないかと私は考える。

本研究において追求したいのは、教師の“ことばかけ”であるが、それは子どもが自己の欲求や感情を冷静にみつめ、反省すること、すなわち自己を見つめることの契機を与える“ことばかけ”であるが、それは同時に子どもが自己を自然に表現する契機にもなる“ことばかけ”でもあることを、『エミール』から読み取りたい。

II. 論文構成

はじめに

第1章 ルソーの「自然」概念

第1節 ルソーの自然状態

第2節 消極的教育

第3節 想像力の現れと人間の変化

—理性の教育の始まりに向けて—

第2章 自然人エミールをつくる“ことばかけ”

第1節 「子ども時代」の“ことばかけ”の考察 —『エミール』第二編、第三編をてがかりとして—

第2節 「第二の誕生」期における考察

—『エミール』第四編をてがかりと

して一

第3節 『エミール』から学ぶ“ことばかけ”
第3章 社会を変えうる子どもを形成する“ことばかけ”

第1節 現代の教育問題とルソー教育

第2節 『エミール』の現代的意味と“ことばかけ”の考察

第3節 子どもが自然に自己の感情を表出することができるようになる教師の関わり方と“ことばかけ”

おわりに

III. 研究の概要

ルソーは、現実社会の不自由、不平等、不幸をより徹底的に暴露するために、人間が本来自由で平等で幸福であった「自然状態」をあえて理念として設定した。人間の幸福とは、秩序の中に正しい位置を占め、自己の欲求と能力の均衡を保っている状態、すなわち自然本性にとどまることである。一方で不幸とは、他人の憶見にとらわれて、他人の目に幸せそうに映ることに努めるために、実際に幸福になることを諦めなければならない「自己との矛盾」状態である。ルソーはエミールに消極的教育を行うことによって、身体的＝物的存在にとどめ、幸福を享受させた。自然にしたがう消極的教育において、子どもに対する教師のことばかけは限られたもので、その姿勢は、あくまでも見守ることと、子どもの自然本性にしたがう姿を、共に実現していたことであった。人間は、成長するにしたがって、事物のみの関わりではなく、人間との関わりの中で生きていかなければならない。生活環境の変化に伴った、外的要因の表れによって子どもの潜在的能力は変化をもたらされる。真に人間として生きるためには、想像力を働か

せて、他人に自分を移して考えることができる精神的＝道徳的存在になることである。ここでは、想像力を正しい方向に導くことが必要となる。

子どもが自己のうちにとどまるためには、教師の配慮が重要になる。それは、子どもを自然状態にとどめる配慮であり、子ども時代においては、手、口をださず見守るという配慮であり、道徳的・社会的関係を意味することばの使用は避けられるべきである。また、子どもの経験をもって観念を形成していくために、教師は事物や環境を操作することがその教育の主となる。また、かけることばも、「明快」で「単純」で感情が込められていない「冷静」なものであることが望まれる。青年期への移行においては、他人を比較することによる墮落を防ぐために、想像力を正しい方向に導くことが重要となる。さらに、感情が芽生えるこの時期には、「感動をこめて、さらにあわれみをこめて」語ることによって、虚栄心や競争心や名誉心などの、人と比べさせるような感情を起させないようにしなければならない。想像力を刺激するような比喩を用いず、そのままのことばで伝えなければならない。加えて、教訓を学ばせる際には、ことばよりも実例による方法に有用性があることを主張する。

日々変化する日常生活の中で、その恩恵を賜った反面で、失ったものを自覚し、教育において、自然本性を取り戻す可能性を見出すことを、ルソーは教えてくれた。彼の教育思想、自然概念を考察することは、私たちが無自覚のうちに失ったものを教えてくれる契機であり、今日の教育の在り方を問い直す契機でもある。

主任指導教官 杉尾 宏

指導教官 杉尾 宏